

冴ゆる

透明なみづやはらかに秋の入り
まほろばの水の花火に落つるやう
返答の淡々として貸小袖
縄跳びのひちちかなるや二つ星
月の夜がプラスチックドライブにて回る
めいめいに袖動かして盆の月
裏庭の萩垂れをるに祖母の声
煮溢れて臥待月の余白かな
夕月夜たをやかなるを整へて
平らけし海の背中の中の月
保険金詐欺多発なり早稲の飯
戸締まりの錠冴ゆるなり恋をして
飛行船は冬の雲食うてをるのか
虹の冬なれば互ひの頬の色
雪しまき指先に色鮮やかに
山笑ふ邦訳版の遠くから
内外より春一番の零れ落つ
啓蟄や助手席側で見える風
恋のより重たく卒業の日和
母親の卵の罅や凍返る